南インドにおける衣装と装身

高橋 貴

Abstract

In this paper, I discussed first the characteristics of traditional or formal costumes as Mundu, Vesti and Thruthu which have been used by the Nair (Nayar) people in Kerala State of South India. Then I verified these clothes in ritualistic context. The living put on clothes without a stitch. The dead is also wrapped with one white cloth and tied by a few strings which are torn partially from it. No stitch means purification. In order to purify the body, some materials as sandalwood paste, turmeric powder and cowdung ash are attached on the forehead and chest. Purification is the common key word for these customs. On the other hand, they are afraid of pollution and evil eye. Main reason for taking bath and changing clothes everyday is to remove pollution. Durability for pollution is different according to the materials. Silk is not polluted for one week while cotton is only for one day. Many ornaments attached from early childhood have role to avoid harm by evil spirits. Purification and pollution are basic concepts to comprehend traditional clothes and body decoration among the Nair.

1. はじめに

インドでは周知のとおり成人女性の多くはサリーを着ている。サリーは今やインド女性の代表的ファッションとなった。産地もインド各地にあり、それぞれ独特のサリーを生産している。インドの工芸品を紹介する冊子にはたいていサリーについての記述があり、産地ごとにデザインや着方などを紹介している。調査報告書や研究書も少なからずある。ではインドの女性衣装はサリーによってだけ代表されるのであろうか。そんなことはない。各地には伝統衣装と民族衣装といえるものが数多くある。たとえば西インドのスカート（ガーグラー）、ブラウス（チョーリー）、ウェール（オールニー）、北インドのズボン（シャルウェール）、上衣（カミーズ）などがあり、その他でも枚挙に暇がない。
そうした伝統衣装のひとつは両インド・ケーララ州のムンドゥ、ウェスティ、トットゥがある。これらは、男女が下半身に巻きつける腰布、上半身にまとう肩掛けである。いずれも無縫製の白い布である。本稿ではこれらの衣装と着身（具）をとりあげて特徴や儀礼的意味を論ずることにする。取り上げた理由は以下のとおりである。

①北インドとは異なる両インド独特の衣装であること。北インドと南インドとは何かについて対比されるが、衣装についても同様である。たとえばパールフットやセーニーの石棺女神像は胸を露出せず、頭にはヴェールをかぶっているものが多いのに対し、アジャンガやエローラでは胸を露出し、頭には何もかぶらない女神像が多い。これらは北のアーリア文化と南のドワリダ文化の違いからきているという（Kumar 1998, p. 65）。南インドの独自性、地方性（両インドの中でもケーララ州と他の州での共通する）に注目しなければならない。

②伝統衣装はふだんでも年寄りたちが着ているが、若い人たちも公的な行事の場やヒンドゥー寺院の儀礼に参加するときには正装として欠かせない。つまりこれらの衣装が伝統文化や行事との結びつきを強くもっていることを示している。いいかえれば人びととの身体親や美意識、社会関係、宗教儀礼、価値観を示す上で重要な指標になる。これに対してサリーは日常着としても暗着としても定着しているが、どちらというとファッション性が強く、伝統文化との結びつきは弱い。

③調査対象としたのはジャーティ名ナイル（ナヤール）である。ナイルはケーララ州のドミナント・カーストであり、バルボサやトメ・ピレスなどの著書を通じて、ヨーロッパ人に古くから知られていた。往時のナイルは王に仕える戦士として高い身分を与えられていた。現在は農民、官吏、教員などになっているが、依然として威厳を保っている。田畑を耕作する肌の黒いドワリダ系の人びとを監視するのは黒いこうもり傘を日除けに白いムンドゥをまとったナイルの男性なのである。衣装と着身からナイル文化の一端を検証する。

ナイルについては、これまでガフ、中根千恵などが現地調査を行い、詳細な研究書を著している。しかしいずれも論文を示すともしない母系的な大家族制度（あるいはその崩壊状況）についての研究であった。レヴィ＝ストロースや清水周徳などはこの特異な家族制度に注目し、論文でとりあげている。また最近ではタミール・ナードゥ州での世俗的ヒンドゥー教研究で数々の成果をあげているC. J. ヒューラーやイギリスの女性人類学者メリンダ・ムーアも現地調査の上ナイルの家族制度についての研究を発表している。筆者もかつて母系制度は親族間をも母系的な継承が行われていることを論じた。こうしたナイルの研究でいつも重視されたのは女性である。インドでは珍しく母系制度をもつジャーティであったため、ナイルの女性は今でもしっかりした顔付きをし、家庭内での地位を築いている。とくにかつてクラワディル・アマとは呼ばれた一家の女主人である年長者にはその風影が強く残っている。服装と着装の点からそうした女性たちを把握したいというのがそもそも出発点で
あった。ナイル以外のジャーティについては必要に応じて触れるとすぎない。各ジャーティはそれぞれ独自の習俗をもっており、ジャーティを横断する比較観察が必要であるが、それは筆者の手にあまる。

ここで報告するデータは、1985年ごろからケーララ州中部のトリチュールやバルガット周辺において断続的に行ってきた調査で得られたものである。儀礼などはできるだけ参加して確認すると労めたが、中にはすでに行われていないものもある。しかし近過去のことなのか現在も行われているのか、かならずしも区別しなかった。というのは歴史的変化を探ることが目的ではなく、ヒンドゥーの意味的世界の中で衣服や装身がどのように存在しているか探ることを目的としたからである。

ケーララ州平野部の気候は年平均気温が27℃、一番寒い12～1月でも21℃を越す。したがって一年を通じて暖かい、薄手の衣服あるいは上半身裸といったスタイルでじゅうぶん過ごすことができる。なお一番暑いのは4～5月、雨季は6～9月、乾季は12～2月である。現地語マラヤーラムはカタカナで表記した。

2. 子どもの衣服と装身

子ども、とくに生まれたばかりの子どもは肉体的にも精神的にも弱い存在で、社会関係も未形成である。いくつかの儀礼やしきたりは子どもに健やかで成長をもたらし、家族や親族との関係を構築するものといえる。

新生児は二重の意味で特別な存在である。第1は親しみブラの強い状態にある、という点である。そのため母親とともに15日間特定の部屋に隔離された。そこにはベッドはなくござが敷いてあり、子どもはその上に横たえられる。とくに服はなぜ着させず、寒ければ毛布をかける。第2は悪霊がつけりやすい存在ということである。とくに昼と夜とも区別できたい夕方は特に恐れが強い。そのためサンディーヤ・ウィリヤとよばれる儀礼が行われた。これは、産婦の妹、産婦の妹の子など少女が行うもので、たとえばターメリックとライムを指おろして水に溶いたもの（赤）と、もみ散らして水に溶いたもの（黒）を皿に入れ、まわりに7つのランプを並べて火をつけ、これを子どもの頭の上でまわしながら祈願する。

15日が過ぎると、家族がヒンドゥー寺院から聖水をもらい受けてきて、母子はそれでお霊を浄める。これではじめて隔離から解放されることになる。寝室に移された乳児はおしめランゴットをあてがわれ、ふつうは裸。寒いときには上衣を着てベビーベッドの上に寝かされる。おしめは木綿で、底辺が50cm、高さが23cmほどの三角形をしている。日本のおしめと比べるとかなり小さく、しかも薄い。ほかの申しわけないのをくるんんです。といった感じである（写真1）。ベッドには長さ2～3mの白い布を敷き、頭の部分は折りたたんで高くしておく。ここに乳児を寝せ、腹に薄い布をかける。小便をしたら、おしめが小さいため
敷布を張らすことがあり、そのときには敷布を
少しずつずらしていいく。

生後28日目にイルワタットゥ1とともにやられる重
要な儀礼が行われる。これは耳に穴をあける儀
礼で、4-50年前までは男女児ともに行ってい
たが、現在は男児に対してのみ行っている。作
業を行ったのはモデルと金細工師（ジャーティ
名はタタン）であった。かれは乳児の耳にバター
を塗り、銅製の針でつばやく穴をあける。乳児
は少し泣きだけで血もでない。この針は小さなものなので、耳飾りの中に入れておく。儀礼は、
お供え用に用いた米、黒砂糖、バナナ、ココナ
ツ、10ルピーでいくとある。しかしながら今で
は医者に穴をあけてもらうことが一般的になっ
ている。

ひきついて父親（かつては母方のオジ）や
祖父母から装身具一式が贈られる。耳飾りは、

男児が鼻に玉をつけたカドゥカン、女児が花のようにきれいな装飾をほどこしたカンマールで、
どちらも金製である。指輪モディラムは金製のもの1個が与えられるが、誤って食べてしま
う恐怖があるので指にはつけない。腕輪にはウラとカブがある。前者は細くて直径の大き
いものを、後者は厚くて直径の小さいものをいい、どちらも金製のもの2個1組になっている。
カリウラというガラス製の腕輪もある。これは黒い色をしており、邪神を防ぐものとされ
る。腰飾りは、男児がひものの大ネーレ、女児がチェーン状のアラニャルで、金製か銀製で
ある。これとは別に黒い木箱でつくられた腰ひもペールマニも与えられる。足首飾りはチャラと
いう。これは金、銀、銅、鉛、鉄の5種類を材料にした細いひものを組み合わせてつくってあ
る。やはり邪神除けの意味がある。首飾りチャラはもう少し成長してから贈られること
が多いようである。これらの装身具はペールマニを除いてふだん身につけることはない。

イルワタットゥの日から男女児とも一種の化粧を始める。額の中央には丸い黒ポットゥを
つけ、眼の下には墨で陥取りカンマーンをする。墨は今では店から購入するが、かつては各自
の家でつくっていた10。男児は3才ごろからやめるが、女児はそのまま続けることが多い。た
だしだ成長した男でも誕生日にはこれをつける。ポットゥやカンマーンをつけた乳児はじゅうぶ
んかわいくしくており、邪神が付け入りやすい。それを防ぐためには墨をちょっとつける。

生後6か月目の日はチョルヌーとよばれる。子どもはこの日からごはんを食べる。出産に
とどまろうとしてもこの日でなくなるとされ、一家でヒンドゥー寺院に詣でてごはんを食べさせる
南インドにおける装飾品と装身

ところの儀礼を行うところもある。子どもには男女とも金の首飾りが贈られる。身内の子供からは服、装身具、ベッドなどが贈られる。

生まれた1歳目になって男女とも赤いふんとしコーナカムをつける。かつて、ナップーディリはエラ・コーナカムといわれるものをつけている。これはパナナの葉で作られ柔らかくしたものである。低カーストの人びとにふれて檜をつけたような場合、すぐに取替えができた。子どもが歩きようになるとふんとしの上からムンドゥをつける。オナラの日には父親から初めて衣服が贈られる。これは比較的高価な、金縛の入った縁製のムンドゥ（カセウ・ムンドゥという）が多い。寺院へ行くときや結婚式に出るときなど特別な場合に着用される（写真2）。

女子の場合、つぎの服の変化は、現在でははっきりしなかったが、かつては初潮前の行われる一種の結婚式を契機にしていた。これについては後述するが、年齢でいうと11か13歳の寄数年の初日で、この日以降少女はムンドゥと、ふんとしに代わってオナラを着けるようになる。服の上ではもう一人前とみなされることになる。

以上の例からもわかるように子どもは生まれたときから節目節目にさまざまな装身具が贈られる。しかしこれらは身につけることがほとんどなく、したがって装うことだけが目的とはいかない。むしろ一つは贈り手を受けるのがあいだの親族としてのつながりを確保することにある。これはたとえば28日の儀礼で名づけ儀礼が行われることに表れている。男親や祖父母は子どもに装身具をつけてからその左右の耳に名前を3回ずつきやく。長子の場合はかつては母系の祖父母の名前をつけることが多かったのである。装身具のもう一つの役割は子どもを邪視や悪霊から守ることにある。そのため5つの金属をまぜた最強のバンチャ・ローハムや銀などの高級な金属、あるいは黒など色のついたもののが使われる。

3. 女性の衣装と装身

ナイルの成人女性はつやのある長い髪をもち、いくつかの装身具と洗濯したばかりの真っ白な衣服をつけている。はでではないが、なかなか清潔感のある人びとである。はで過去の
異邦人の眼中にはどのように書いていたであろうか。たとえば15世紀のアラブ人はつぎのよう
に書いている（A. S. Menon 1979, pp. 110〜114）。

ナヤールの女性たちは腰布を巻くだけで、その他の部分は裸のままである。この点、男
も女も王も変わりはない。これに対して、プラファマンの女性は体をおおう。ナヤールの
男たちは女たちを装身具やきれいな布で飾り、人びとの集まりに連れて行ってみせばらかす。

また、19世紀初めごろのナイルの女性について、ジェームス・フォーブスはかなり詳細に
書いている。

女の衣服は男のそれとよく似ている。黒くて光沢のある髪を頭の上で結び、ココナッツ油
を塗り、ビアクダンやチャンパを香水としている。耳は重い宝石をつけた耳飾りで肩に
触れるくらいまで重っている。これが美人の条件である。耳の穴にはココナッツの葉を丸く
束ねたものをさしこみ、ただでさえ穴を大きくしていた。穴の直径が2インチほどになるこ
ともまれではない。穴の傷口が治ると、たくさんの耳飾りをつける。腰のまわりにはゆっ
たりとしたモスリンをつけ、胸は裸。これはマラバールの女性だけの特徴である。しか
かの女たちが金や銀のネックレスに、ヴェネチア産金箔などをつけて身を飾っている。重い
腕輪もしている。また、銀の箱をぶらさげ、中にベーテルの実をいれている。肌は、芳香
のある油を塗っているためすべすべとしている。

以上の記述にはナイルの女性の伝統的な姿がよく描写されている。補足を加えながらもう
少し詳しくみることにしよう。まず、記述にはなかった下半身の下着オナラである（図1）。
これは白い無地の縫い目のない一枚布で、長さ2.5〜3 m、幅1 m余りのものである。手の
先からひき分けて長いものをモラムというが、オナラの長さは個人によって5〜7モラムとまち
まちである。「おれの妹のオナラは誰のものよりも長い」といって自慢するようにオナラは
直接観念と関係する。素材は薄くて柔らかい木綿が使われる。着方は一般にカッパ様式とよ
ばれもので、一枚の長い布の一部を足の間に通し、背中のところにまくし込む。カッパ様式
は、中央インドや南インドでのサリーの着方でもある。現在オナラを着用するのは中年以上
の女性のようである。この場合ムンドゥのときでもサリーのときでも着用する。しかし若い
女性は寺院へ行くときなど特別な場合を除いて着ることは少ない。

オナラの上に腰布ムンドゥをまとう。ムンドゥは長さ3.5m、幅1.2m前後のもので、やはり
1枚の縫い目のない綿布である。これは生なりか漂白したもので、練に沿って赤や緑の線が
1〜2本つく。外出用のものは生地が上等になり、線は金や銀などは入になり太くなる。
この上等なタイプのムンドゥがオナラのときに贈られるわけである。ムンドゥの着方は、ま
図1 オナラの着方

1. 布を前で合わせ、背が中心となるようにする。a～dはそれぞれの布の角を表わす。
2. 右の布を体に巻きつけ、左の腕にさむ。
3. anges bを右腕にさし、三角形をつく。
4. eを上へつかせできる。
5. b'の位置でタックをとり、a～h、b'の部分を棒状にする。
6. 線まりを通ってaを後へまわし、腰にさみこむ。
写真3 80数歳になる老婆とその長男。老婆はブラウスとムドゥを着ている。未亡人であるが、髪には金の首飾りをしている。耳たぶの穴が大きい。男性はムドゥにシャツ。これが今の正装であり、外出着。

写真4 ブラーマンの女性。まだ学生でふだんはズボンなどをはいているが、家で祭りをするときにはウェスティ、ムドゥの正装をする。

ず布を腰の後ろにまわし、その右端を左腕にあわせる。他の一端を右まわりに巻きつけていき、最後の端は若干折り返すようにして右腰にとめる。着るときの手は、縦の文様の線をまっすぐにすること、襟が広くすくれずまできて足を隠すようにすること、布の右端の一部を長めにとって左腰の上から少し垂らすこと、などである（写真3）。

上半身は、フォーブが指摘するようにかつては膝であったが、現在はブラジャーとブラウスをつける。これらはサリーを着るときにつけるものと同じである。昔の習慣にしたがって、老人の中にはブラジャーをつけない人もいる。ブラウスは丈の短い薄手のもので、身体にぴったりあわせて仕立てる。色はより白がふつうであるが、色つきのものも好む人もいる。

ブラジャーとブラウスの上に肩掛けウェスティをつける。ソナラ、ムドゥと同様これも一枚の縫い目のない縞布である。ムドゥと同じ柄で対して売られている。大きさは長さが2m、幅が1mほどである。着るときには、まず布を腰の後ろにまわし、前で両端を合わせる。左端を右腰にさらめ、左まわりに巻いて上半身をおおい、左肩から後ろに肩掛け風に長く垂らす（写真4）。ウェスティは胸おおいとしても使われる。着方はムドゥのそれとよく似ており、これによって乳房の上部からひざぐらいままでがおおわれる。

ナイルの女性はふだんから身体を清浄にし、装うことを心がけている。朝は起きるとまず
南インドにおける衣装と装身

池に入ると沐浴クリーをする。このときに髪を洗い、新しい服に着替える。水から出るとゴマ油かココナツ油を体中に塗り、マッサージを行う。人の説明では女性は火曜と金曜、男性は水曜と土曜の2回行うものだという。マッサージは若さや健康を保つための秘訣とされる。これらの油は髪の毛にもつけられる。女性は髪を長く伸ばしており、沐浴後、髪をくしにかざす姿もどこまでも見られる光景である。髪に油をつけることは髪を柔らかくし、つやをだす効果があるとされる。身だしなみの最後はバクダンを水とともにすりおろしてベースト状にしたチャンダナムを指につけて額に塗る。これは本来女性のつけるものではないという人もいるが、中年以上の人はよくつけていると。

女性のあいだでもっと一般的なのはポットである。これは、マリアマ女神をまつった寺院などからお下がりブラサーガとしても考えられる赤いフクンクマムやターメリックで、額に丸く塗る。最近は布製で（裏に楳がついている）形もハート形、楳円形などさまざまなものを額に貼るようにになった。まゆと眼の下まぶたは黒く彩って眼の美しさを強調する。

沐浴は夕方に行われ、このときにも衣服を替える。汚れた衣服は、かつてはナイのサブカーストであるウェルカダット・ナイールが洗濯した（今は出入りの洗濯人が洗う）。他の低ジャーティに洗わせると髪が移るので避けている。ただし生理のときの衣服はマナンが洗うきっかけであった。女性が3日間部屋にこもるんであい、マナンの妻が毎日来ては汚れた服を持って帰った。洗濯はふだん池で行うが、このときだけは川で行った。マナンの妻はそもそも主婦であり、ナイの家の関係は長期にわたって続き、結婚式などあらゆる機会に出席する権利を持っていった。

装身具に関しては、目に付くのがフォープラスも書いていているように、耳のピアスの穴である。高齢の女性はたいてい大きな穴をあけている。穴を大きくするには炭か竹をさし込み、それを使んだん太くしてゆく。そこにはトダとよばれる大きく重い耳飾りがぶら下がっていた。しかし、そうした耳をもつ女性は高齢なため（未亡人になったという理由もある）、装身具を取り外しており、大きな穴だけが目立つ。

鼻飾りムクティは７～８才ぐらいから上の女性がつける。つける場所は左の鼻翼で、一種の魔助けと考えられている。この他に身につけるものは首飾り、腕輪、足首飾りなどである。

材料は金からプラスティックまでさまざまである。

ここで結婚をきっかけに女性の服装がどのように変化するかみることにしたい。まず現在の状況であるが、どちられでも他のインド諸地域と同様に未婚者は、既婚者、未亡人という3つのステータスが女性を判断するための重要な指標となっている。未婚の若い女性は色の多いものを好んで着る。まず大学生はスカートにブラウスである。スカートの着用はふつうの学生でいのの幼年期に限られる、なぜならば成人女性の場合、服や髪を露出することは構わないのに対し、足首を出すことは一般に不譲従ではずかしいことだとされており、まだ性的に未熟な少女にのみスカートの着用が許される。高校生や大学生はシャルワール・カミー
ズを着ることが多い。軽やかなパンツ・スタイルで、長いマフラーをなびかせながら気持と歩く姿はケーララの田舎でもごくふつうの光景となっている（もっとも都会ではロング・スカートも多い）。

既婚者はスタイルの上ではっきりと区別される。インド人の女性は一般に髪を中央で分け、後ろに長く伸ばしているが、既婚者は髪の分け目の額部分に赤い粉ケンフムを塗る。ただしこの習慣は主としてケーララのものではないので、やらない人も多い。もう一つ、既婚者はタリという短い金の首飾りをする。これは金の鎖の先にひし形のレクトを取り付けたもので、結婚に際して夫から贈られる。結婚式では、花婿と花嫁の間で花輪、サリー、指輪の贈与が行われる。サリーは金糸の入った豪華なシルク・サリーである。タリの贈与は式のハイライトの一つである。タリはふだんから身についておくが、夫が死んで未亡人になるとは限らない。これは寺院に寄進するか、とっていて臨む場合である。子どもの育つ場合でもそのままであがることはない。タリは火葬のときに火の中に投げ入れることもある。

未亡人は身を装うことをしないため、ポットをせず、装身具もはずす。服装はムンドゥとウェスティであるが、漂白したものに限り、生成りや色物は避ける。着方そのものには変化はない。

以上が現在のナルイ女性の姿である。しかし20世紀の初めまでの状況はこれとはまったく異なっていた。一言でいうと結婚を契機にした服装の変化はなかったのである。その辺の事情をタリに例をとって述べてみよう。タリは、かつてはもう少し遡った時期に赠られていた。C. J. フェラーによると、少女が初潮を迎える前にイナガンと呼ばれる男性によって贈られる。タリを贈与されることによって少女は結婚しうる年代に入ったとされ、その意味で1団の結婚式と解釈されている。しかし必ずしも実際に結婚するわけではなく、またタリも儀礼が終わると取り外してしまう。タリは性成熟を象徴するものであっても、結婚を意味するものではなくいうことになる。このことも関連してフェラーはタリがインドのボディーズの葉を表しているのではないかという。それならばこの葉は多産を意味しており、タリの意味ともよく結びつく。

タリをもらった女性はいつでも結婚することができた。しかし母系制で、しかも男女が結婚しても別居別世帯をするという珍しい制度をもっていたため、夫婦の結びつきはきわめてゆるいものであった。タラワとよばれる母系大家族の中で力をもっていたのは年長者であるカルナヴァン（男）やタラワディ・アマ（女）であった。裏を返せば、経済的にも心理的にも夫のもの意味は小さく、結婚によって女性の地位が変化するということがなかったのである。離婚や夫と死別した女性は再婚することも自由であった。したがってナルイの女性は未婚か既婚かの区別をする必要はなく、当然服装にもそれと違った違いは表れないかった。
4. 男性の衣装と装身

若い男性はといえばズボン、シャツ、サンダルという近代的なスタイルが一般的であるが、年長者の場合はふだんでも伝統的な民族衣装を着ている人が多い。伝統的な衣装は基本的には大きめのとくとり、細い目のない一枚布である帯布ムンドゥと肩掛けトットゥからなる。ふだん家にいるときなどは、上半身には何も着ずに裸でいる。またムンドゥを二つ折りにして腰を巻き、差し込んでいることが多い。これが涼しく、作業もしやすく、歩きやすいからである。雨の降っているときには帯を巻くこともできない。しかしこれは私的なスタイルであり、会合などの集まるところではもちろん、ふだんでも客や年長者などに会うときには黒く伸ばして裁縫をたたす。いわゆるヴェシェティ型と考えられる着方である。

ムンドゥには、一枚だけでなく使われるやや厚手のシングル・ムンドゥと、二枚重ねで使われる薄手のダブル・ムンドゥがある。大きさは前者が長さ1.8m、幅1.2m、後者が長さ3.5m、幅1.2mで前後である。前者がケーララでは古くから使われてきた。色は白が多く、女性の色のように色のついた袋に入ることは少ない。着方は男性の場合と同じで、右から下に巻きつけ、最後は右肩で留める。縫を地面すれすれまで下げることも同様である。

若い人々や低い階層の人たちのあいだでは柄のついた帯布ルンギを着ることが一般的になっている。その理由は派手で着れやすいし、汚れも目立たにくい、といったことである。ルンギはそもそもムスリムが着る衣装としており、ムンドゥと違って左側に縫いこむように着る。

以前はムスリムと、それを象徴するルンギを着た人はナイルの家に入ることは許されなかったという。したがってブラーマンやナイルなど上層の人びとあるいは役人、教員などのインテリは今でもムンドゥしか着ないという人が多い。

下着は木綿製のふんとしコーナカムが伝統的なものである。コーナカムは縁90cm、幅20cmほどの1枚布である。つけるときには布を腹のあいだに渡し、腰ひもから垂らして留める。しかし現在ではこうした下着をつけいるのは老人のみで、一般にはパンツが利用されている。

下半身のムンドゥ、上半身のトットゥが男の日常着である。トットゥは肩掛けのことで、大きさは長さ1.3mから1.5m、幅70cmほどである。これを縫い長に折って左肩にかけ、両肩にはおって前であわす。トットゥはこの他さまざまな使い方がされる。寒いときに肩にはおる、暑いときに肩子がわりにこれであろう、日差しか強いときや雨が降っているときには頭にかぶる、頭にものを乗せて運ぶときのクッションとする、汗を吸う、ものを運ぶ、風呂敷のように包む等々（写真5）。トットゥは男がいつでも身につけておき、必要に応じて使い分けることができる便利な小道具である。

トットゥはより生地が上等で、もっと長くしたものが外出着、正装である。ヒンドゥー寺院へ参拝に行くときにはこのスタイルが望ましい。しかし公的な場では白いシャツを着ることが一般的になっている。
ところでブラーマンの衣服はナイルと同様であるが、聖樹ブーズルをつける点が異なる。この儀礼はウパニシュダムといい、ブラーマンの少年が13歳ごろになると一詠を唱えて盛大に行われる。会場は庭先で日除けのよしきに張り、その下の地面は牛糞を塗ってたたきにし、米粉で吉祥文様を描く。父と子は指導者の指示をおおぎながら、招待者の前でホーマーの火に米や聖草を投げ込み、マントラを唱える。そして最後に白い木綿の帷子を脇肩から右腕側にかけ、少年は添って一人前になる。

女性と同様、ナイルの男性も朝の沐浴後、ブラクダンを身体に塗る。ブラクダンは寺院からもらってくるかあるいは自分の家で木を摺りおろしてつくる。これを指につけ、額には丸いチャンドナ・ポットゥ、のど、胸部、二の腕には一本線のチャンドナ・クリを描く。横の3本線はウィラ・クリといい、これはカルキダガム月（7～8月）の1ヶ月間にかすぐに女性がつけられる。額に線の3本線を描くグピ・クリはタミル・ナードゥ州ではヴィシュヌ派を表すされ、ケーララ中部ではあまり見かけない。この他、牛糞を焼いてつくった黒なる灰パスマムも用いられる。パスマムはどの家でもふだんから用意しておくべきもので、鉢や箱に入れておく。朝夕2回つけるが、朝は灰を水で溶いて横に3本線を描き、夕は水で溶かずにそのまま1本線を描く。つける場所は額、のど、胸部、二の腕、ひじ、手首、背中などである。特殊なものとしてムクティ・チャンドゥというものもある。ムクティというのは8～9月ごろに生える草で、葉を採り手でくすぐる黒い液汁を額につける。ときにカルキダガム月の最初の7日間はつけると幸いを招くとされる。これらもののつける意味は「脳と心臓を冷やしてリフレッシュする」「身体からの浸出物を吸収し、汗が眼に入るのを防ぐ」「生命力の中心である額を守る」といった意味が挙げられるが、一般には身体を浄化するものと考えられている。
5. 衣装における浄性と纖れ

ケトラの衣装を考える場合、単に物理的な特徴だけでなく、浄性、繊れ、邪視、吉凶といった観念的な側面を抜きにすることはできない。これまでの記述には多少重複するが、まとめてみることにする。まず取り上げるのは無縫製という点である。縫製した衣服自体はリゲ・ヴェーダの時代には知られていたが、北インドの寒い地域では古くから用いられていた。しかし南インドでは無縫製の薄い布をたため、ときには裸で過ごす生活がふつうに行われていた。一つは気候が暖かいという理由による。もう一つは無縫製が浄衣だからである。なぜそうなのかはっきりしないが、人々はどのように認識し、説明する。いくつかの使用例をみればそれも納得できる。もっとも典型的なのはヒンドゥー寺院での祭司である。腰にムンドゥを巻き、上半身は聖服を掛けるのみで裸である。こうした姿が聖所にあってもふさわしいとされる。祭司だけでなく、寺院助手や楽師も同様の姿である（ただし公的な寺院 = Devasome Board に所属する寺院の職員は宗教者との立場上の違いを主張しているかのように白シャツを着る）。参詣に訪れる信者たちも同様で、男子の場合はムンドゥとトートゥが望ましい。今日ではズボン、シャツなど縫製したもの、皮製の靴やベルトを身につけて寺院に入る人もいるが、本来は望ましくない。女性の場合はムンドゥとウェスティ、サリーが望まれる。いずれも無縫製の1枚布だからである。浄衣という考え方では生者だけでなく死者にも当てはまる。遺体は、仏教にパナナの葉をあてがってから白い1枚の布ショートボクダワで包む。これを三箇所でしばるが、ひもは包んだ布の端を切り裂いたもの（切り離さない）が用いられる。つまり死者の衣装も1枚布できているということになる。ちなみに遺体は事情が許せば家の南側の畑地で火葬するが、そのまわりはマンゴーの木1本だけからつくられる。だから旧家で

写真6 遺体は1枚の布で包まれ、マンゴーの木のみの上で火葬される。
は敷地の一角にかならずマンゴーの木が数本植えられている（写真6）。

浄衣を着るときは沐浴して身体を浄めることが必要である。それは特定の材料が用いられる。ピクダン、ラーメリック、バスマムである。ピクダンは英名サンダルワッド。ひじょうに高価で、神像や宗教用具をつくる材料になる。浄化儀礼にも不可欠で、それを塗りおろすための石チャナは家庭やヒンドゥー寺院の必需品である。たとえば寺院では本堂の脇に聖水をとるための井戸と神への食事を準備する台所があり、その一角に塗り石を台に固定している。祭司はここを儀礼をするたびにピクダン・ベースト＝チャンダナをつくり、自らの額、胸、二の腕などに塗る。儀礼が終ると、集まってきた信者にお下がりブラサーダとして与える。

ラーメリックは衣装、身体浄化、宗教儀礼に多用される。新品の服をおろすときや、ブラーマンの少年が新しく聖経をさがすときに、ラーメリックを少しつける。黄色が金を意味し、吉のサインとなる。ひもを手首に巻いてラーメリックをつけば悪霊を退けないための魔よけとなる。女性は沐浴後、身体に塗る。顔や手に塗ってむだ毛をなくし、生えにくくさせる。ラーメリックは黄色であるが、身体に塗ると黒くなって健康色になるという。肌の白い病気に効き目があるとこうもいう。出産や月経のときに身体に塗る。第三の眼のある眉間には浄化の意味で塗る。また家庭祭礼などでは一つまとまるラーメリックで神を象徴させることもある。このようにラーメリックはひじょうに重要な植物である。この延長上にあの黄色いカレーがある。

もう一つ重要なのがバスマムである。これは牛糞を焼いてつくった灰のことである。通常、儀礼に欠かせない。作り方は牛糞をボール状にして5〜6日干し、円錐形に積み上げて頂上げておおう。火をつけて燃やし、さめたところに手でつぶして粉にする。質でごみをとり、きれいな水とまぜて日干しにして乾燥した灰を土器や木箱にしまっておく。朝夕、沐浴が終わるとこれを額や胸につけ、身体を浄化する。水で溶いて身体に塗れば皮膚病にならないともいわれている。

ところで浄いということとは謹れを前提にする。謹れには3つの種類がある。1つはアシュダムとよばれるもので、飲食、大小便、人との接触など日常生活することによって必然的に生じる。たとえば木綿の服は一日で謹れ、棉の服は一週間ほど着なければ謹れしない。したがって木綿の服は毎日変えることが望ましい、寺院へ行くときは洗濯して清浄にしたものをつけなければならない。それに対し絹の服はたとへ少々汚れていても謹れはおらず、祭司でも数日着た服でプージャーに参加することができる（ただし絹は高価なので一般には木綿を用いる）。この種の謹れは手を洗うか沐浴などして服を着替えれば消減する8）。したがって人間に本質的に行わずする謹れではない。

2つめの謹れはブラタとよばれる。出産や死が起こると、当事者である母子や遺族が謹れた状態になる。この謹れは沐浴しても消減しない。他者に謹れを移さないためには一定期間隔
南インドにおける衣装と装身

離するしかない。その期間はパーティによつて異なる。ナイルの場合は出産も死も15日間である。ブラーマンはこれより短し、ナイルより低い階層のパーティは一般的にもっと長い。生と死は衣服や装身具を変化させる。生まれた子どもは親族からさまざまな装身具が贈られる。他方、夫の死を迎えた女性は装身具をはずし、衣装も白いシンプルなものを着用する。初期や月経の穢れはプラガといわないが、同じような特徴をもっている。

3つめはカースト制度に関わる社会構造的な穢れである。穢れの度合いは生まれによって決定される。沐浴によっても隔離によっても解消されないので、この制度は公的に撤廃されたが、地方では今でも職業や婚姻と関係して重要な意味をもっている”。

劣位な者が優位な者へ作用を及ぼすという点で、穢れと類似しているのが邪視である。邪視とは美しいもの、立派なものに対する他者の絆みで、それが災いをもたらすと考えである。インドのみならず、中近東から北アフリカまで広く見られる。ケララではカンスタットゥガといい、人びとがたえず気にしているもののである。邪視を避けるためにいろいろな工夫がなされる。具体的よく見かけるのは新築の家の前によく下げられた人形である。獅子や龍のかたちをしたもののもある。しかももっとも典型的なのはつぼを逆さにして鼻を見る模様を描いたものである。そのまま軒にぶら下がり、あるいは手足をつけてちょうどかしみのように立っているものもある。建築中の家の前やよく炎症した薬の瓶などにも置かれる。よく動いて作業ができない積りにあつがらしをぶら下げ。人間の場合は子どもが邪視につけ入れられやすい。かわいいと思わされることは避けなければならない。そこで男の子は右顔、女の子は左顔に薬をちょっと塗る。これで穢くなっただというわけである。ポットやカンマシなど装身に使われる材料がつける位置を少しずらすことによって反対の意味に変わる。装身具が同じような役割をはたすことすますに述べた。では邪視が災いをもたらしたときはどうするか。たとえば子どもが病気になるとき、母親はうがいをすると塩をつけ赤ん坊の前で振り、火にくべ、邪視を追い払う。こうして他人の結びをりょうほどに身体をむやみに美しく装ったり髪をすすぐことは避けられる。もっとも自分が美しすぎるから邪視にねらわれていると思う人はいないであろうが、適度な装いはともかくも控える理由にはなっている。

吉凶という考え方もある。たとえば家から出て初めて出会ったもので縁起の良し悪しを判断する。パルボザはつぎのように書いている（大航海時代叢書V, p. 533)。「ナイレ（ナイル）はみなたれへ立派な戦士であるが、幽霊を信じている。また吉日と凶日を持ってい

凶日には何も始まらないし、何もしない。かれらはまた前兆を信じ、もしかれれば何かをしようとしていた時に猫が前を横切ると、それを止めてしまう。もしかれたら何かを取るために家を出ようとした時に、鳥が木の枝を運んでいるのを見たら、また家に入ってしまおう。この吉凶のリストは現在でもたくさん追加することができる。たとえば縁起の良いのは2人のブラーマン。死人。牛（とくに後ろ向きの牝牛は良い）、魚。縁起の悪いのは1人
のブラーマン、未亡人、宿泊に行く人、使った斧を持つ人、花火を持つ人などである。後者の場合には家にもどってバーン（ビーチ・チューニング）をかんでふたたび外出する。同じように曜日も良い月の悪い日のことがある。たとえば月曜、水曜、金曜が良いのに良い日で、火曜と土曜と日に土曜は良いのに悪い日という。前後した服を着たときも同じ曜日があたってはまる。散髪が金曜、とくに生まれ月の金曜が良い。オイルバースは月が月曜、水曜、土曜が良い、月曜、金曜、日曜が良いという。特定のものが曜日が良いとか悪いかはもとから、このような吉凶判断はしばしば行われる。また一日が良い日となるように、朝起きると右手を見る。右手の各指にはガナバティ、シヴァ、ヴィシュヌなど神がやどっているからである。

ケーララにおいて衣装と装身具は単に寒さ暑さから身体を守ったり、身体を飾ったりするだけでなく、形態や着方に宗教意識や身体関が反映され、贈与や洗濯をとおして社会関係が確認される。ここでは断片的にしか論じることができず、分析も不充分であったが、豊かな意味体系のあることが少しは明らかになったのではないかと思う。

注

1）たとえば以下の文献を参照。
   中根千枝『家族の構造』1970年、東京大学東洋文化研究所

2）インドはナショナリズム（星日）という、中国の二十八宿にあたるものがある。誕生日はナルマリタマ月12か月と27のナショナリズムの組み合わせで決まる。したがって28日目というのはナルマリタマが一巡する日ということになる。この日、新生児は初めてバナナを食べる。これは母乳バナナを乾燥させて、粉にしたものをミルクとともに粥状に煮たもので、6か月目の新生児の主要な食べ物であった。

3）自家製の甘さ作り方、古い布をとじてゴマ油に浸し、火をつける。これをつぼの底にあて、ついた麴をとる。この麴にゴマ油か糖（バター・オイル）を混ぜて練り、ベースト状にしたものである。

4）ケーララ中部に住む3つのブラーマンの一つ。ナヌブーディリは一番古く、後にカルナータカ州からエンブラニディリ、タミール・ナードゥ州からアイェルが移住してきたといわれている。

5）オアラはマラヤラム語のチンガム月（8月〜9月）に行われる。ケーララでも最大の祭りの一つ。ボート競争、ゲイン、神々の巡行などが数日間にわたって華やかに催される。祭りの期間中、家族はねぎらしい言葉をかけて家族の一言一人に衣服を2枚増やする習慣になっている。この衣服をナサブワという。広場などには仮設の小屋が果て、大量的衣類が販売される。今日では現金で渡し、自分の好みで衣服を購入することも一般的になっている。

6）マンナンは石・れんが積みを職業とするジャーティ。ケーララにはラテライト（紅土）が多く、
一部溶岩のように固くなっている。これを斧で四角形に切り出し、家の壁や井戸枠などにする。その妻マナティは産婆の役割をする。

7) イナンガシは同じナイルではあるが、当事者のレジン（血縁集団）とは異なるレジンの男性成員の中から儀礼に精通している人が選ばれる。結婚式でホーマなど重要な儀礼を指揮し、葬式でも死霊ブレラが祝儀ビトゥルに参集するときの儀礼を指揮するなど儀礼上きわめて重要な人物である。

8) ナンプーディリ・ブラーマンの場合、小便のあと身を清める方法は、土を局部につけ、水で洗うことを7回繰り返す。大便の後も同じことを12回繰り返す。マヌ法典には「清浄を望む者は小便のときは男根に対して一度、大使のときは尻に対して三度、片手（右手）に十度、両手に七度土を用いるべし（5-136）」とある。

9) カースト制度は明かなる身分差別であるため公的に廃止されたが、各ジャーティは世襲的な職業をもつ。その製品やサービスを互いに提供しながら地域社会を形成してきた。世襲的な職業は職業選択の自由を規制するものではあったが、他方で職業教育を無償で提供した。つまり子どもは日常生活の中で父の仕事を見ながら技術や知識を習得した。何代にもわたって受け継がれるように技術は洗練され、合理化される。他方、日当50〜100ルピーの換算で製品の値段を決めればよく、結果として安価で質の良い製品が提供されてきた。これについては、後日改めて論じること定である。

参考文献

マリーロイス＝ナブルツァーカショフ 1986「インドの伝統染織」紫紅社
Menon, A. Sreethara 1979 Social and Cultural History of India Kerala, New Delhi: Sterling Publishers Pvt Ltd.
トメン・ピレス 1968『東方諸国記』大航海時代叢書Ⅴ岩波書店
リヨスホーテン 1968『東方案内記』大航海時代叢書Ⅷ岩波書店